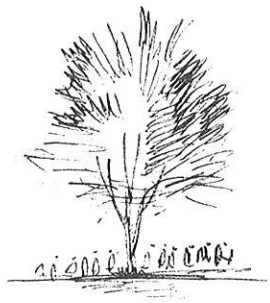
ひかりのこ

光の子



No.82　1999. 1. 1.

● 神の召しに応える（ヘブライ人への手紙第５章４節）

「うさぎさんをおんぶ」　　え・中島英子

謹賀新年

社会福祉法人　光の子どもの家

「初明り」

初明りわけて光の子の家に
隅っこで嬰泣いてゐる初景色
干襁褓くぐり新年おめでたう
泥んこの子どもがひとり初詣
山の子の初夢に海ひろがれり
狐火が出るいつまでも寝ない子に
父恋の凧母恋の手毬唄

黛　執（『春野』主宰）

発行／社会福祉法人 光の子どもの家　TEL／0480-72-3883　FAX／72-6649　振替／00130－１－128022
編集／光の子 編集委員会　〒349－1155 北埼玉郡大利根町砂原277　印刷／社会福祉法人 共愛会

新しい歌を主にむかって歌え

詩編　33・3

新しい歌を主にむかって歌い
美しい調べと共に喜びの叫びをあげよ。

理事長　福島　勲

詩編はここで新しい歌を歌えというとき、新しい曲、新しい詩を意味すると同時に、新しい局面、出来事、年月に際してそれに相応しい歌をと言うのだろう。

このところ教会では新たに編纂された賛美歌21を用いている。

時代に添って新しい用語や曲が組み入れられて、流動する世代の若者らに人気があるのかも知れない。が正直言って老人らには必ずしも歓迎されていない。そのことの理由は、曲や歌詞がどうこうと言う前に老人は新しいものに対して、精神的に物理的に順応性に欠けているということである。

昔、東京本郷のさる教会に一人の粋な老人がいた。生粋の江戸っ子でベランメー口調で、毎日曜夕礼拝の説教をしていた。話上手でクレオパトラなど登場し面白かった。

この人が讃美歌は多すぎる、四曲あればよいと言っていた。どの四曲なのかは聞き漏らしたが、これは一九三一年（昭和六年）に改訂されたものについてであった。

実のところ私も新しい讃美歌には声が出ない。歌詞や曲を目で追っていただけでは意味が薄い。詩篇は声を上げて高らかに歌えという。

とは言え子どもの甘えたような言葉遣いの表現は老人のわれわれには耳ざわりである。

これは聖書の訳語にも言えることである。最初の翻訳委員、松山高吉、植村正久、井深梶之助らの訳文は見事なものであるが、翻訳に当たって心したことは「漢文体の文は好まず雅文風（みやびぶみぶり）の文も聖書には適しからず、然ればとて西鶴や春水の如き俗文は野鄙に過ぐれば其中庸を得、普通にして卑俗ならず、又荘厳さを失はざらん文体をこそ工夫して作り成さんと心構へ・・」ということであった。（溝口靖夫・編著、松山高吉）

言葉は生きている、変遷、成長する。苦心して訳された聖書も今では古典化している。

讃美歌21もこうした配慮のあったことと思う。

しかし歌詞や曲が変化し現代化されようとも、そのテーマは古いものと変わることはない。神を讃美し、感謝し、ざんげ、告白、願いまた決意を歌う。したがって、どんなに新しい歌であっても真実信仰を伴わないで歌うなら新しくも何でもないことは言うまでもないことである。

逆に古来の古い歌であっても、信仰の真実をもって歌えば、それは常に新しい歌である。

二十世紀も今年を加えて後二年を残して迎えた新年の初め、振り返ってみれば、この世紀はたしかに大きい破壊と逞しい進展の世紀であった。二度に亘つ世界大戦と恐るべき破壊の原子爆弾の出現であり、科学全般の急速な進展である。

かつてはおとぎ噺であった月世界への飛翔、宇宙開発や遺伝子の組替による生物の変化など、まさに驚異の極みである。

その揚句の果てに、世紀末の今、わが国初め世界的な不況の恐慌に見舞われている。

経済問題だけではない。日々報道される事件の数々、詐欺、贈収賄、殺人、民俗宗教の異なる人々の絶え間ない争いと殺戮、人の心は荒び、世はたしかどこか狂っているとしか思わざるを得ない状況である。

尊ぶべきものを忘れ、畏るべき方を畏れず、神を見失って己が腹を神とし、恥を栄光としている。（フィリピの信徒への手紙三・一）

この世紀末が人類終焉かとも思えるとき、年頭に当たり、人々が真心から神を畏れ、敬い、神の国と神の義を求める（マタイによる福音書六・三十三）まことの喜びと、希望に満ちた新しい歌を歌うのを、聞きたいものである。

学者もどきのつぶやき ㊲

落ち葉は朽ちず

山形大学医学部教授
仙道　富士郎

歩いて二〇分もかからないのに、車で大学に来ることが多いのには我ながら呆れるばかりではある。駐車場から大学の通用口までの間に落葉樹の木立があり、本来なら回り道をしなければならないのだが、近道をしようと横着者たちがけもの道をつくってしまい、当然のことながら（？）私もそこを通って、教室に到る。何がはずみとなったのか、全く記憶にないのだが、一昨年の秋、通るのに邪魔なくらいいっぱい地面に落ちている落葉樹の葉が、冬を越したらどうなっているのかしらむと興味を持った。この忙しい世に何とくだらないと怒られてしまいそうだが、学者などというものは（或いは筆者だけなのかも知れないが）そんなもので、大学にいるときは四六時中、あの実験はどうなったとか、この研究はどうするとかばかり考えていて、心のゆとりが無い。考え事をしながら木立を歩いていて、落ち葉が足に、まとわりついたのかも知れない。

次の年の春、予想に反して落ち葉は、一冬越したのに秋口の時と同じにかさばったままである。驚いたのは、何層にも重なった落ち葉の間をくぐり抜けるようにして細い長茎の草がヒョロヒョロと顔を出してきたことであった。引っ張ってみると、茎はかなり長い距離、落ち葉の間を横に這った後に垂直に立ち上がっている。見るからにひ弱なその茎は握るとつぶれてしまいそうで、そういうことが原因なのか、彼等は束になって落ち葉の間を横に走っていた。立木には所々松の木が植えてあり、その下にまばらにではあるが、茎のしっかりした草たちが地面からまっすぐに伸びてきている。なるほどと感心し、そのことがきっかけとなり、時々であるのだが、ここを通るときに落ち葉たちの変化に注意するようになっていった。

しばらくは何も変化がなかった。いや、ぼんやりとやり過ごしていたのだろう。

ただ、春から夏になっていくころにいつも困るのは、おそらくは木立の土のあるところからだと思うが、おびただしい数のミミズが大学の建物のポーチのコンクリートの上に這いだしてきてその上で死んでいくことである。熱いコンクリートの上をのたうち回っているのや、すでにひからびてしまったのまでいて、どうもあまりよい気持ちにはなれない。いわゆる気持ちが悪いというのと少し違って、大げさにいえば、われわれ人間どものしている悪行のひとつを見せつけられている気がするのである。

この大学に赴任してきた二十五年前もこうだったか、何となく最近のことのようにも思えるのだが、ぼんやりと考えことをして歩いている身としては、あまりハッキリしたことは言えない。

昨年だったか、今年だったか定かでないのだが、落ち葉が散る前のころの秋、落ち葉が虫食われ状態になっていることに気づいた。見渡してみると落ち葉のかさはだいぶ低くなっていた。落ち葉は虫たちの食料になっているという、考えてみれば当たり前のことが分かったとき、なぜか嬉しかったことを覚えている。

落ち葉が朽ちるなどと、たやすくいってはいけないということを体験できたことに感謝せねばなるまい。少しづつ、少しづつ身の丈を小さくしながら、落ち葉たちは山の虫を肥やし、水を守っているのだろう。

体調の悪さに気づき、昨日から二十分足らずの家からの道のりを歩き始めた。あいにくの雨なのだが、大学構内に入ると、いつも見ているのよりはずっと小さいミミズがコンクリートの上で死んでいる。

やはりなにかがおかしいような気もする。

2つの文化に生きる
16

日本キリスト教団東大宮教会
バーガー　京　子

HAPPY NEW YEAR!　新しい年を迎えて、心を新たに又、新しい希望が膨らむ。バブル崩壊後、日本経済は年々悪化していると言われている。新卒行政の就職率も年々下がる一方である。「失業」という言葉も決して遠い存在ではなくなっている。表面的なことを考えてみると、なんだか暗い気持ちになってしまう。

けれども少し見方を変えてみると、この時代は皆、「幸せになりたい。」と思いながら、「本当の幸せとはなにか。」を暗中模索するための神さまからの人間への試みの時代にも思えてくる。人間にとって「本当の幸せ」とはいったい何なのだろうか？お金があることなのだろうか？愛する家族がいることだろうか？好きな食べ物がお腹いっぱい食べられることだろうか？すてきな洋服で自分を着飾ることだろうか？人から尊敬されることだろうか？社会的に高い地位につくことだろうか？人を愛することだろうか？それとも人から愛されることだろうか？五体不満足で生まれ、健康でいることだろうか？

昨年の暮れ、街の本屋さんの店先でこんな本を見つけた。『五体満足』。著者は大学生の二〇歳を過ぎて間もない乙武洋匡くんという人だった。表紙の見出しに「障害は不便です。だけど、不幸ではありません。」と書かれていた。本の表紙は両腕両足がない身体で電動車椅子に座り、爽やかな笑顔で横断歩道を渡っている乙武くんの写真だ。早速、買って家に帰った私は一晩のうちに読み終わってしまった。期待通り、爽やかな読みごたえ。というより、私が表現したかった「幸せな生き方」とはこれだ！といったある種の「運命的な出会い」のようなものを感じてしまった。本の中で著者はこう語っている。（よく、「障害を乗り越えて」だとか「障害を克服して」とかいうけれど、ボクやボクの両親にはそういった表現が全く当てはまらない。・・子どもの頃は「特長」と捉えていたボクの障害だが、今では、単なる身体的特徴に過ぎないと考えるようになった。太っている人、やせている人、背の高い人、低い人。色の黒い人、白い人。その中に、手や足の不自由な人がいても、何の不思議もない。よって、その単なる身体的特徴を理由に、あれこれと思い悩む必要はないのだ。）乙武くんは生まれつきの先天性四肢切断という障害で五体満足どころかそのうちの四体がなしで生まれてきた。子どもの頃、行くところ、行くところ、いじめには会わないものの、「気持ち悪い」とか「どうして手足がないの？」といった質問をされ、その度毎に「ボクはね、生まれた時から手足がなくて・・」といったことの繰り返し。それを聞いて納得すると友だちはもう聞かなくなり、次からは友だちになったと言っている。

私は、「障害は単なる身体的特徴」と言い切っている乙武くんから、私が今まで求めてきた「異文化間に生きる」ことの楽しみのようなものを教えてもらった気がする。

異文化もある種の「特徴」であって、「背が高いのね。」とか、「バーガーなんてハンバーガーみたいね。」とか、「ご主人、目が青いのね。」とか、一見、いわゆる『普通の日本人』と違うことへの批評なり質問なりいただいたとしても、「それはね、夫の先祖はね、遠くヨーロッパからアメリカに移住してね、バーガーという名前はドイツ語でお城の回りに住む人という意味でね・・」と説明すればいいことなのだ。腹を立てたり気にしたりすることではなく、単なる異文化における特徴でしかないのだ。

乙武くんは今、生きる目的を見つけて「心のバリアフリー」に貢献するために電動車椅子に乗って全国をとび歩いている。せっかく障害を持って生まれてきたのに「宝の持ちぐされ」はもったいない。ボクにしかできないことが一杯ある。「生きる」ことが楽しくてしょうがない、と言いながら。

私も今年一年「生きる」ことの楽しさをかみしめながら、私にしかできないことをひとつひとつ心を込めて実行していく年にしたいと思う。

■エッセイ■

赤い花

彫刻家　中島　睦雄

赤い花が好きだ。それも、ハイビスカス。

三十年以上も前のことだが、弟夫婦が奄美大島へ旅行した。その時、土産にもらったのがハイビスカスの一枝であった。挿し木すれば根付くというので、そうしてみると、確かに根付いて、しかも、思ったよりもどんどん成長し、夏の終わり頃には、花を付けたのである。その年にはたった一つだけしか咲かなかったが、朱色に近い赤い花は他のどの花にもない色であった。花びらは、紙のように薄く繊細で、S字型を描いて下がっている雄しべの先には、星のような黄色いつぶが光っている。そして、ほんの少しの風にも、微かに揺れている。

やっと一つだけ咲いたこの花も、翌日には落ちてしまった。しかし、このはかない美しい花の印象は、深く私の心に残った。改良された大輪の品種と違って、野生に近いのだろうか花は小ぶりで控え目であった。

昭和四十六・七年頃だったろうか、南太平洋のタヒチ島へ旅行した。画家のゴーガンが、フランスの近代文明社会に背を向けて、移り住んだあの島である。ゴーガンは、このタヒチ島で、数々の名作を描いたのだが、私の旅行は、一瞬の通りすがりのスケッチ旅行である。とは言え、重い絵の具と、丸めた何枚かのキャンバスは忘れなかった。

島の断崖に作られたホテルに着くと、ネヘネヘというきれいな布を一枚身に巻き付けただけの、半分裸のような、若い女性が、部屋の前にあるテーブルの上に、いろいろな花を飾ってくれるのである。小さな皿の上に、今切り取ってきたばかりの花々を、さりげなく飾るのである。プルメリア、ブーゲンビリアなどに交じって、あのハイビスカスも明るく咲いていた。

街からホテルまでの間にも、ホテルの周辺にも、目のさめるような明るい太陽の下で、花は至る所に咲き乱れ、輝いていた。この様な島では、ハイビスカスなどは、ごく普通で当たり前の、平凡な花なのかも知れない。しかし、私にとっては、この上ない美しいものに写ったのである。

この島は、極楽なのかも知れない、と思った。古い仏教美術に見える赤や緑や紫などでいろどられた極彩色の世界は、子の南太平洋上の島々の、或いは極めて暑い国々の、自然の景色そのものかも知れない、とも思った。

高等学校に勤めていた私は、生徒と、よくしゃべったりする機会があった。そのうちの一人M子さんと話している時、ハイビスカスの話になった。彼女は、家族と一緒に沖縄やあちこちに何度も旅行している。そこで、沖縄で見たハイビスカスの花や、フウリンブッソウゲなどのことなど、話がはずんだ。フウリンブッソウゲは、ハイビスカスの原種で、花がまるで網のようになっている。珍しい花だ。私は、写真では見たことがあるが、実物を見たことはないと話した。

夏休みの終わり、彼女は小さな鉢に植えられた実物のフウリンブッソウゲを持ってきてくれたのである。「八丈島に旅行した時に見つけたんです。」との事であった。私は、それはそれは大切に育てた。翌年だったか翌々年だったかに、待望の花を付けた。写真で見たものよりも、花が少し黄色がかっていた。いかにも原種という感じをただよわせた、不思議な花であった。

私は、何枚も何枚も写真にとってみた。水を欠かさないように注意もしていた。四月頃には地植にし、寒さが近づくと鉢にとって部屋に入れてしまう。こんな事を繰り返すうちに、大きく成長し、たくさんの花をつける様になった。私は有頂天になっていた。

昭和五十四・五年だったろうか、家内が病気になってしまい、長い入院生活が続いた。私は、病院通いや何やらで、この花への注意がそれたのだと思う。急にやってきた寒波に、大切にしていたハイビスカスもフウリンブッソウゲも、一発でやられてしまった。全滅であった。残念であった。何とかして、もう一度あの花を手に入れたい。あの美しい赤い花に会いたい。今、そう思っている。

プ・リ・ズ・ム

河のほとりで

倉沢家

あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願いいたします。

昨年六月、倉沢家に生後一ヶ月の赤ちゃんがやってきた。三時間足らず毎の授乳に入浴、この家をほぼ一人で切り回しをしている私の生活は一変した。

この赤ちゃんの存在は家のみんなに強力な影響を与え続けている。

亜紀は母を知らない。抱かれて授乳の経験など全くないだろう。おもちゃの哺乳瓶を買い求めてそれで水を飲んでいた・・!。高三の嬉も、離乳食をやる度に私の仕草を食い入るように見つめていた。彼も生後まもなく乳児院で育ってきたので母に離乳食など親しく与えられたことなど無い。残りの子どもは二歳・四歳まで両親と育っている同胞なので心の揺れとしての影響は受けなかった。

子どもたちの乳幼児期の育ち方が思春期真っ直中の今でも様々な形ではっきりと浮かび上がってくることに改めて驚いた。

実際に乳児を育てて〝授乳〟の神秘的なまでの大切さというか言葉にならない厳粛さを痛感した。実母であることに越したことはないだろうが、一人格が祈るような心を込めて〝授乳〟したかどうかが、その子どもの人格を形成することに深く関わっていることを身をもって確認させられた。また、中高生、ある時はショートステイの小学生などとの暮らしの中に赤ちゃんがいることでもたらされる〝平和〟や〝和やかさ〟〝柔らかさ〟は、何ものにも代えがたい生活上の〝利益〟であった。

私が育てることをゆだねられ〝授乳〟したこの女の子は、もうじき我子となる。

倉沢　智子

子どもたちの季節

仙道家

明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願いいたします。

十二月第二土曜日、学校はお休み。東大宮教会の永野さんが『あすなろ文庫』という読書グループを主宰しています。そこのクリスマス行事の〝こころ座・電灯かげえ〟公演にご招待を受けました。

小学生の由花、美夏、佳美、幼児さんが三人、ショートステイの二名の九名の子どもと実習生、神田保母と私の十二人で出かけました。

ようやくみんなが揃いバスが出発しました。ところが、百メートルほど進んだ時、神田保母が「祐子さん、招待券持った?」と訊いてきます。あっ、持っていない!バスを運転している中村が、「もう時間がない、電話して持ってきてもらうから」と携帯電話で連絡してくれました。

駅に着くと、そこには書記の田中が招待券を持って待っていてくれました。入ってきた電車に無事に乗り込んで蓮田の会場に無事に間に合いました。

こころ座のみなさんの楽しい歌、そして初めての電灯かげえに子どもたちはもちろん私たちも引き込まれて、心から楽しむことが出来ました。永野さんに思いを込めてお礼を申し上げては蓮田の駅に向かいました。

道路でも、駅のホームでもはしゃぎ回る子どもたちに、声を上げて注意しますが、かまわず子どもたちは走り回ります。ひとりでもパワフルな子どもですから、グループになると何百倍もパワーアップします。私たちはそのパワーに圧倒されながら楽しかった思いに包まれて家路を急ぎました。

永野さん本当にありがとうございました。

池田　祐子

暮らしの彩り

笹山家

新年のお慶びのご挨拶を申し上げます。

ちょっとしたことがうれしい、日常の一こま。

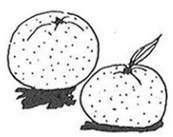
小さな美季と花子が眠った後の夜遅く、中二の珠美と共に、彼女への感謝と支援の意味を込めて、近くのコンビニまでの往復の散歩。一緒に歩いているという、その事実だけでも、嬉しい。初冬の寒さが厚着のコートの上に心地よい。たくさんでなく、ぽつ、ぽつと話される言葉の行き来が、何となく、うれしい。

幼稚園のお迎えに行った帰り道。先に走っていく五歳の美季のその走りっぷり。二歳で初めて会ったときの、走ることのままならないたどたどしい足取りを思い出し、胸があつくなる。その成長が、拙い自分の関わりと重なって、おそろしく、そしてやっぱり、うれしい。

三歳の花子を抱っこして、目を合わせて笑い、笑い返すとき、それだけなのに、うれしい。

珠美が花子を抱っこし、美季と遊ぶ。小ぐまのようにじゃれ合う美季と花子。つられて笑っている珠美。子どもたち同士で空気が動くとき、極上にうれしい。

笹山　恵理



原田家日記

謹んで新年のお慶びを申し上げ、本年もよろしくお願い致します。

十二月十四日　一ヶ月ほど遅れて佳美の七五三のお祝いをした。

鎌田さんのご協力で、念願の着物を着せてあげることができた。

時季がはずれていたので、立派な千歳飴は用意できなかったが、リボンをつけて、家に配るお菓子を用意した。

当日、下校途中の佳美を車で迎えに行くと、満面の笑みを浮かべ、今にも飛び上がりそうな足取りで車に乗り込んだ。

大好きな花子ちゃんの家に行き、ふたりとも鎌田さんに着付けをしていただく。紅を曳き、髪飾りをつけ、小さなお姫様ができあがった。

まずは、グループホームの倉沢家に伺ってお披露目。

「まぁーかわいいー。」

佳美はにこにこ。

本家に回り、施設長室で菅原先生に抱き上げられ、写真を撮っていただく。事務所での田中先生、中村さんの大きな歓声も、心に暖かく響く。

二軒の家を回り、原田家に戻ってほっと一息。

みんなの暖かい顔や言葉のおかげで、佳美の笑顔はしばらくそのままだった。

親戚ではないけれど、皆がぐ~んと近く感じさせられ、とても心温まる経験を私もすることが出来た。

よかったね、佳美ちゃん!

木部　すなお

光の中で

佐藤家

明けましておめでとうございます。

風邪は万病の元と言うとおり、まだ大丈夫だろうと思っていたが、あまりにひどい咳と、疲れが重なり、数日間寝込んでしまいました。

そして、担当している和喜も感染したのか、風邪を引いてしまい、ふたりで寝込んでしまいました。しかし、弟の洋だけは元気に走り回っていました。

夜、三人で寝ていると、洋がこんなお祈りをしました。

「かみちゃま、みんな、まもってくだちゃい。かんだちゃんがなおりますように。」

たった四歳の男の子が、他の人のためにお祈りできるものかと、辛い時だけに、涙が出るほど感激しました。

そんな感動を与えられる者でありたいし、そんな時がたくさんつまっているような暮らしをつくれますようにと、祈りながら今年の歩みを始めます。

神田　幸枝

現場から

光の子たちと ⑪

藤本 曜子

明けましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願い致します。

新しい年を迎えるときはいつも、この年はどんな一年になるのだろう、と考えます。今年は、私の担当グループの子どもそれぞれにとっても、私にとっても、ちょっと、いやとても特別な一年になりそうです。

それは、四人の子どもそれぞれが〝最後の一年〟を迎えることになるからです。

最年少の裕くん、甘えん坊でわんぱく坊主、今までずっと家で過ごしてきました。でも裕も来年になれば幼稚園入園です。四月からはお家で過ごす最後の一年になるのです。元気に幼稚園に通えるようになるために、最後の一年をどんな風に過ごすそうか、あれこれ思いを巡らします。

詩美ちゃんは、小学校生活最後の一年を迎えます。

内弁慶で学校ではおとなしく、引っ込み思案だった詩美が、大きく変わったここのところ一年、元気で明るくいつも笑っていると先生から評価していただくようになりました。三年生の冬の縄跳び大会で二〇分跳び続けてダントツ一位になった頃からでしょうか、少しづつ自信をつけ、確実に成長してきています。写生会では二年連続の金賞、駅伝の選手の候補にもなっています。

六年生ともなれば、もう思春期です。心の揺れ動く中で、最後にどんな思い出が残せるのでしょうか、とても大事な大切にしたい一年です。

悠子ちゃんは、中学三年生になり、中学校生活最後の一年を迎えます。そして中学三年生といえば、初めて自分の進路を自分で決定する年です。漠然と高校進学を希望している彼女は、きっと受験を体験することになるでしょう。そして何をおいても頑張ってきたバスケットボール部、夏の引退まで、そしてその後を彼女はどう乗り越え、過ごすことになるのでしょう。学習、部活、学校、家での生活、たくさんのプレッシャーと試練、人間関係の中で、何を学び得られるのか、彼女にとってよりよい進路とは・・。盛りだくさんの一年になることでしょう。

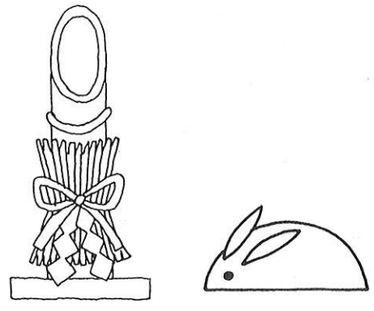
紅子ちゃんは、二つの最後の一年が待っています。一つ目は、高校生活最後の一年です。第一志望の高校を目指し、必死で勉強していた中学三年生の頃からもう三年にもなるのかと思うと早いものです。

高校では、部活で全国大会に出場したり、関東大会で優勝もするほどの活躍ぶりです。その部活もいよいよ数ヶ月となるわけです。そして、大学進学を目指します。高校受験を経験しているとは言え、彼女の目指す大学は、倍率も、難度もその比ではありません。どれだけのプレッシャーと自分自身と戦うことになるのでしょうか。

二つ目は、二歳から過ごした光の子どもの家での生活です、進学し、残って生活を続けるという選択肢もありますが、実質的には最後の一年となります。どんな思いを抱えながら、これまで生活してきたのでしょう、そしてどんな思いを持って最後の一年を迎えることになるのでしょうか。

私にとってのこの一年、それぞれの最後の一年を迎える四人の子どもたちと共に過ごすのです。それぞれの子にとって、大切なかけがえのない時間にどのように関われるのか、責任重大です。プレッシャーを感じないわけにはいきませんが、子どもたちひとり一人が抱えるものを考えると、それに押しつぶされているヒマなど無いのだろうと、自らを奮い立たせるしかありません。

幸か、不幸か、大切な一年を私と共に過ごすことになってしまったみなさん、どうぞ今年もよろしくお願い致します。



養護メモ 77

子どもに関わる その1

菅原 哲男

平均一ヶ月に二件ほど、電話や来訪しての養育に関する相談がある。

そんな相談事業をしていると広告したことはないのだが、全国にお送りしている『光の子』が三千部を超えた十年ほど前から、遠くは九州、北陸、東京、岩手、秋田など全国的な範囲から相談がある。しかし、殆どがこの地域周辺からのものである。

『光の子』が八千部を超えている現在は、読んでいただいていることへの感謝の思いを込めて、そんな相談には、特別に訓練を受けてはいないが、経験を積んだ者が丁寧にあたってきている。経験がないと、往々にして不調を来してしまうからである。

長いものでは四時間を超えるものもあるが、多くは数十分である。おねしょや万引きの小学生、不登校の中高生、時には親などの心身の不調や家族問題など多岐にわたる。

電話相談から来訪しての相談となり、場合によっては家庭訪問などをして家族生活の具体的なありようについて考えていただくための契機になりながら関わることもある。

相談を受けるということは、助けを求められていることで、その要求への可能な限りの対応をしなければならないと考えている。

どんな資格で、と問われれば、人間として、としか答えようがない。

昨年五月、新生児を抱いた二十代半ばの母親が来訪して相談があった。

住み込みの仕事をしている所の同僚との間に子どもが産まれた。同僚との関係を秘匿していたので、職場に明かして住み込んでいる部屋に帰る訳にはいかない。相手とは愛し合っているので何とか生活をしていきたいという。

生後十日余りの嬰児を抱いた母は困惑していた。父なる者も駆けつけて、何とか一緒になりたいという。

何よりも、その赤ん坊のためには、落ち着いて生活できる環境が必要であった。町内に二軒のグループホームを展開していることで本家に彼等が暮らすに必要な六畳間を仙道家の二階に確保することが出来た。

夫は仕事を終えると駆けつけ、子どもが寝てしまうと住み込みの職場に帰った。母が出産のため産院にいた時、生活相談をしたが、そこでは乳児院に入れるようにすすめられ、手配されそうになったという。退院の日、逃げるように東京の友人宅に転がり込んだが、その友人に家族もあって一週間ほどでうまくいかなくなったという。そして、なぜか、「乳児院だけは利用したくない」と頑なに言うのであった。

出身地は九州で高校を一年で退学し上京して東京などで働いたが、うまくいかず、転々として数年前からこの辺で働いていた。夫は新潟から同じ様な軌跡をたどり今の職場で出会ったことなどを、食事や暮らしの中でぽつぽつと話していた。

お世話になっている栗原造園や羽鳥設備などに、夫の職を頼んだり、不動産屋さんに安い住まいなどを心がけてもらいながら、親子で暮らせるような手だてを講じ始めていた。

やがて生後一ヶ月が過ぎた。

そんなある日、昼食に母を呼んだが返辞がない。いやな予感が頭をよぎった。二階に駆け上がって部屋に入ると赤ん坊が独り寝かされていた。枕元には、「すべてのことを施設長に委ねる、申し訳ない」という意味の走り書きの書置きがあった。

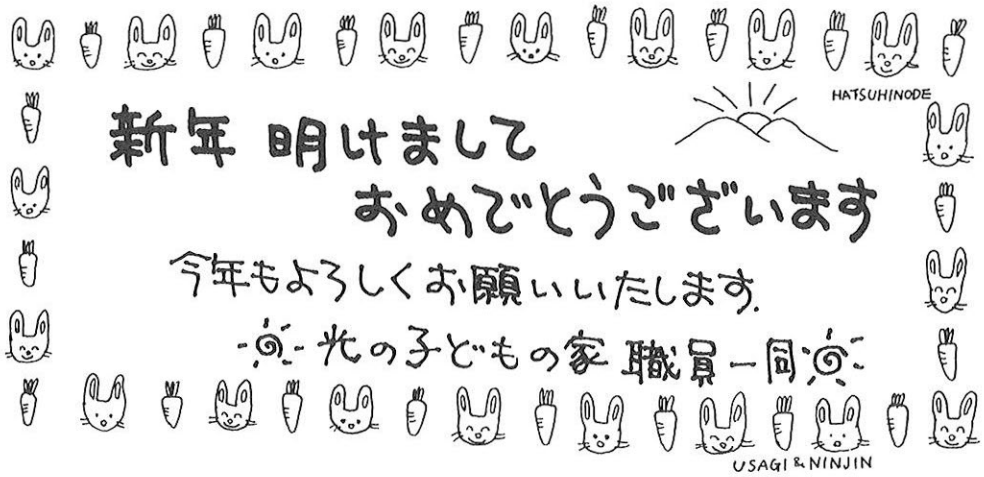
驚き、臨時の職員会議を招集した。職員会議は長い議論の場となった。

二年ほど前に、地域の中学生が産んだ生後一ヶ月の赤ちゃんを様々な事情から依頼され、断りきれなくて一年間育てた経験があった。その経験が、私たちに赤ちゃんを育てる知識や技術を与え、生活を構成する者たちへの赤ちゃんからのかけがえのないたくさんの恵みも与えられることなどを知らされていたことが、大きく影響したのだろう。

結局、親、特に母の意志を尊重しよう。いつか親たちが引き取りに来るまで預かりみんなで育てよう。必要な経費はカンパしよう、などとともに、この赤ちゃんの養育を志願した倉沢保母がこの任に当たり、協力を惜しまないことを確認した。

母の育った町の名を母との話のやりとりの記憶をたぐり、新潟に母の父を訪ね当て、赤ん坊の引き取りを含めた協議をした。祖父からは「母は必ず探す、それまでこの子の養育を引き続いてお願いしたい」と約定書をしたためて重ねて依頼された。

その赤ん坊は月日を重ねて、倉沢保母との間に強い絆を形成し、グループホーム倉沢家と、倉沢の職員宿舎の部屋を行き来しながら、子どもたちひとり一人との間の関係も揺るぎないものになっていく。（以下次号）



日誌抄 ＝ 子どもと創る暮らしの風景 ＝ 1998年 11月1日 ▶ 11月末日

１０月　幼児 ６名 小学生 ５名 中学生 ９名 高校生１０名 措置外 ３名（求職者２名 未自立１名）

７日　紅子 朝日新聞社主催の「高校生海外生活体験の旅」に応募し 第一次の作文と書類選考をパス

９日　町内旗井在住のこの春高校の教師を退職された伊坂利広氏 学習指導のボランティアのお申し出 一番大切で弱い部門への大変強力なご助力を感謝してお受けする 英語を中心に高校生に関わっていただく

１４日　光の子どもの家後援会（金子嘉男会長）の草取りご奉仕 すっかりきれいになりました 感謝

２１日　朝日新聞社主催の「海外生活体験の旅」に紅子合格 １２月１７日からの８日間 サンフランシスコにホームステイしながら グループホームへの訪問 保育所などへのボランティア活動などがプログラムされた 初めての海外生活へ向けて パスポートの取得や様々な手続きなどが始まる

２５日　茨城県の日本キリスト教団諸川教会より 教会バザー光の子どもの家コーナーの益金のご寄付　感謝

２９日　小学校修学旅行 信一 箱根鎌倉方面へ１泊２日

○　村上勇指導員 児童養護施設における地域との関わりについて発題を東日本職員研修会で

今月の物品ご寄贈者　町内の関恵氏 大塚吉春氏 原恵美氏 野村真理氏

１１月

３日　第５５回理事会開催 補正予算案・人事案の承認

○　第１４回感謝の集い 山ノ下恭二東大宮教会牧師の説教をいただいて第１部感謝礼拝を捧げ 第２部を暑いほどの秋晴れの中に１３０名の参加を得て 開設以来お正月の集まりに腹話術を中心に駆けつけて下さっている荒巻幸子氏 １０年に亘って子どもたちや職員たちの誕生日に花束をお贈り続けて下さっている広瀬常明氏 発足以来熱心に地道な後援会活動の秋間儀平氏に感謝状を贈呈し 島田徳三大利根町町長 栗原積也大利根町議会議長 江口敏一関東福祉専門学校副校長 黛執俳句『春野』主宰の懇ろなご挨拶をいただき RED BERRY の演奏と武蔵暴れ太鼓のアトラクション出演をいただいて 和気あいあいの中に終始した

１３日　朝霞・志木などの蕎麦屋さんたちが手打ち蕎麦の実演と夕食会 島田徳三町長より感謝状の贈呈も

２５日　埼玉県指導監査実施

２９日　第１アドヴェント　夕礼拝と楽しい夕食会

３０日　江森ヘヤーサロンより子どもたちの調髪ご奉仕

今月の物品ご寄贈者 町内江森百合子氏 圓山みち子氏 青木稔氏 東大宮教会菊池達氏 加須市島崎なぎさ氏

この年に感謝し 新しい年のお幸せをお祈りします（くら）

反射光

☆謹賀新年☆とうとうこの世紀の終末の年が明けました☆今世紀のキーワードは「乱暴」といえそうです☆乱暴といえるような文明の発展や経済の進展が、そしてあらゆる分野がそう言えば言えそうなのです☆子どもにとっても乱暴としか言えそうもない状況は変わりありません☆少年法が改正されようとしています☆マスコミの報道ぶりや頻度などがそう思わせているのでしょうか、神戸の少年A事件などから子どもたちの凶悪化を放置できないというのが改正論の本筋のようです☆しかし、少年の凶悪事件はこの数年減少傾向を強めているそうです☆１９９６年度に起きた少年の殺人及び殺人未遂事件は七〇代の老人のそれの3分の2以下だそうです（芹沢俊介）☆事実や真実を見据えながら子どもたちの利益をつくり守っていかなければなりません☆「乱暴」から「やさしさ」や「真の幸せ」の世紀への分岐点になれるように、この一年を大事に過ごしたい☆みなさんと共に祝福を祈ります（哲）